

## コミュニケーションメディアとしてのAKB48楽曲

——カラオケにおける中高生の関係性維持の観点から——

玉木博章

### 要旨

本稿では2010年代に絶大な人気を得ていたAKB48のカラオケランキングの高さに着目した。その理由としてレジャー白書の調査から、最もカラオケを利用しておりランキングに貢献していると考えられる中高生の行動や心理が背景にあるという仮説を立てた。そして中高生を対象に2000人近い量的調査を行った。そしてその結果を受けて、高校生女子を中心とした質的調査も行った。それらの分析と考察から、当時の中高生がAKB48を頻繁に歌唱していた理由として、カラオケに参加する他者に対する関係性の維持や構築を志向する心理や、承認欲求が存在し、そうした理由から、知名度があり、複数人で歌いやすく、盛り上がる曲調を持ったAKB48の楽曲が歌唱されていたことを明らかにした。特に本稿の副次的結論として、先行研究において小泉恭子が「隠す」としていたパーソナル・ミュージックが、実際には公共の場で歌唱されることがあること、つまり状況によってはコモン・ミュージックへと変異することも明らかになった。

キーワード：AKB48, カラオケ, 中高生, 人間関係, 承認欲求

### 1. はじめに

#### 1-1 AKB48 とカラオケ

2005年12月、AKB48は作詞家である秋元康を総合プロデューサーとして秋葉原の専用劇場にデビューし、その後には紅白歌合戦に出場等々を経て「国民的アイドル」と称され、2010年代には老若男女問わず認知度の非常に高いグループとなった。そしてその楽曲は毎年CDセールスランキングの上位に位置している。既に玉木博章は、2009年から2020年までの12年分のオリコン調べによる年間CDシングル売上のベスト10を示しながら、AKB48は2010年から2019年の10年間でCD売上の年間1位をずっと続けていることを明らかにしている(玉木, 2022, 76-77)。特に10年間のうちで2011年, 2012年, 2014年は、その年に発表したシングル全てで1位から5位までを、2013年, 2015年, 2016年, 2017年は1位から4位まで独占している。1

位と2位の独占となった2010年、2018年、2019年でさえ目を見張る程であり、最早こうした記録は日本の音楽史上で破られることはないほどの金字塔であるだろう。もちろん、こうした背景にはAKB商法と呼ばれるCD売上に関する議論も随伴することも考慮すべきではあるが、歴史的にも同一アーティストによる10年間の1位独占など例を見ない。

ただ2022年現在の日本では、2012年2月にAKB48の公式ライバルとしてCDデビューをした乃木坂46、2015年8月に乃木坂46の妹分としてCDデビューした欅坂46（2020年10月より櫻坂46に改名）、結成当時は欅坂46の2軍（ひらがなげやき）としての位置づけでありながらも2019年3月にCDデビューした日向坂46の3グループからなる通称「46グループ」もしくは「坂道シリーズ」の方がメディアでは際立っている。もちろん乃木坂46を始め、坂道シリーズはCD売上の面ではかつてのAKB48にまだまだ及ばないものの、現在のこうした情勢を自覚してか、2021年夏にはテレビ東京で「乃木坂に、越されました～AKB48、色々あってテレ東からの大逆襲！～」、2022年冬からは「AKB48、最近聞いた？～一緒になんかやってみませんか？～」という自虐的な冠番組が深夜に放送されることになった。連日ゴールデンタイムにお茶の間を騒がせていた過去と比較してみるとブームの縮小は否めない。ただそもそも公式ライバルとして打ち出した坂道シリーズも秋元康のプロデュースであり、俯瞰的に見てみれば同一人物によるアイドルグループが世代交代をしているだけだという揶揄もできよう。

他方で、こうした坂道グループが未だにAKB48に及ばない点として、CD売上以外にカラオケランキングでの貢献も挙げられる。表1はAKB48の楽曲がよく歌唱されていた当時のカラオケランキングを示している。先述したAKB48の楽曲の中でも、2010年の年間シングルCD売上2位を記録した『ヘビーローテーション』（玉木、2022、76-77）は、カラオケランキングにおいても長く上位を記録していた。『ヘビーローテーション』は2010年8月の発売以来2012年秋までの2年以上に亘ってカラオケランキング1位をほぼ守り続け、3年後の2013年の年間カラオケランキングでもトップ10以内に留まっている。

同楽曲はそれまでORANGE RANGEの『花』が持つオリコンカラオケランキング42週連続1位という記録を抜いて48週連続1位を達成し、ついにはGReeeeNの『キセキ』が最長であった通算80週という1位記録を抜いて81週という当時の新記録に至った<sup>1</sup>。その後、連続1位の記録はゴールデンボンバーの『女々しくて』が記録した49週連続1位という記録に抜かれ<sup>2</sup>、その記録は後に米津玄師の『Lemon』の連続85週という記録に通算1位記録と共に抜かれることとなった。そして2022年現在のカラオケランキングでは優里の「ドライフラワー」が通算1位獲得記録を伸ばしている。一方で連続1位獲得週数記録は、オリコンによれば、2022年1月17日付けで、1位が米津玄師の「Lemon」で85週、2位がゴールデンボンバーの「女々しくて」で51週、3位が優里の「ドライフラワー」で49週、4位がAKB48の「ヘビーローテーション」で48週、5位が星野源の「恋」で47週だとされる<sup>3</sup>。こうした記録を鑑みても、当時の『ヘビーローテーション』が歴史に名を刻んでいることが一目瞭然となる。

表1 JOYSOUND 調べによる年間カラオケランキングベスト10 (2011年～2016年)<sup>4</sup>

2011年(上から順に1位～10位) ヘビーローテーション AKB48 残酷な天使のテーゼ 高橋洋子 Gee 少女時代 キセキ GReeeeN ミスター KARA 会いたかった AKB48 ポニーテールとシュシュ AKB48 小さな恋のうた MONGOL800 ありがとう いきものがかり マル・マル・モリ・モリ! 薫と友樹、たまにムック。	2012年(上から順に1位～10位) ヘビーローテーション AKB48 女々しくて ゴールデンボンバー 千本桜 WhiteFlame feat. 初音ミク 残酷な天使のテーゼ 高橋洋子 栄光の架橋 ゆず フライングゲット AKB48 小さな恋のうた MONGOL800 キセキ GReeeeN マトリョシカ ハチ feat. 初音ミク、GUMI ハナミズキ 一青窈
2013年(上から順に1位～10位) 女々しくて ゴールデンボンバー 残酷な天使のテーゼ 高橋洋子 千本桜 WhiteFlame feat. 初音ミク 小さな恋のうた MONGOL800 ハナミズキ 一青窈 紅蓮の弓矢 Linked Horizon 栄光の架橋 ゆず キセキ GReeeeN ヘビーローテーション AKB48 天体観測 BUMP OF CHICKEN	2014年(上から順に1位～10位) Let It Go～ありのままで～ 松たか子 恋するフォーチュンクッキー AKB48 千本桜 WhiteFlame feat. 初音ミク 残酷な天使のテーゼ 高橋洋子 ハナミズキ 一青窈 女々しくて ゴールデンボンバー 小さな恋のうた MONGOL800 奏 スキマスイッチ 栄光の架橋 ゆず RPG SEKAI NO OWARI
2015年(上から順に1位～10位) ひまわりの約束 秦基博 Dragon Night SEKAI NO OWARI 糸 中島みゆき R.Y.U.S.E.I. 三代目J Soul Brothers from EXILE TRIBE Let It Go～ありのままで～ 松たか子 ハナミズキ 一青窈 Darling 西野カナ 残酷な天使のテーゼ 高橋洋子 千本桜 WhiteFlame feat. 初音ミク 小さな恋のうた MONGOL800	2016年(上から順に1位～10位) 海の声 浦島太郎(桐谷健太) 糸 中島みゆき ひまわりの約束 秦基博 トリセツ 西野カナ ハナミズキ 一青窈 残酷な天使のテーゼ 高橋洋子 365日の紙飛行機 AKB48 小さな恋のうた MONGOL800 SUN 星野源 奏 スキマスイッチ

ただ、カラオケにおけるAKB48の人気楽曲は、他のアーティストと異なり『ヘビーローテーション』だけではない。2013年8月に発売された『恋するフォーチュンクッキー』は発売から1年経った2014年も年間2位を記録している。そもそも2011年は『ポニーテールとシュシュ』、『会いたかった』、『フライングゲット』も年間ランキングに入っているが、表1に示したカラオケランキングにおいて毎年登場する定番曲がある一方で、同じ年に複数の楽曲を上位に送り込んだアーティストはAKB48以外には存在しない。また年間ランキングに3曲が入った2011年の9月には『ヘビーローテーション』と『フライングゲット』そして『Everyday, カチューシャ』の史上初の3曲で週間ランキングのトップ3を独占している。オリコンによれば、これは1996年1月22日付けでシャ乱Qが「ズルい女」と「My Babe君が眠るまで」で史上初の「1・2位独占」を達成して以来、安室奈美恵(1996年)、GLAY(1998年)、モーニング娘。(1998年)、宇多田ヒカル(1999年)、CHEMISTRY(2001年)、モンゴル800(2002年)、コブクロ(2007

年), AKB48 (2011年) の計9組が持っていた歴代1位記録を15年8ヶ月ぶりに塗り替えた記録<sup>5</sup>であるとされる。

加えて、翌2012年の年間ランキングでは、表1にある『ヘビーローテーション』、『フライングゲット』の他に、DAMを手がける第一興商のランキングでは『Everyday, カチューシャ』が10位にランクインしていた<sup>6</sup>。表1はJOYSOUNDのランキングを基にしているため表示されていないが、いずれにせよ2012年もトップ10前後の他のアーティストで3曲ランクインしているのはAKB48以外には存在せず、当時AKB48の楽曲が頻繁に歌唱されていたことは明白である。また2016年には朝ドラの主題歌に使用された『365日の紙飛行機』も2016年カラオケランキング上位に位置しており、曲を変えて2010年代は常にAKB48が歌唱されていたことがわかる。

## 1-2 先行研究の整理から得られる問題の所在

ところで、このようにAKB48の楽曲がランキング上位に位置する現在のカラオケを最も利用するのは若者である。AKB48がカラオケランキング上位に位置していた2012から2015年版のレジャー白書によれば、その4年間でカラオケ参加率の世代別1位は、男で20代が1度だけ1位を獲得した以外は、男女共に常に10代が1位に位置している(日本生産性本部, 2012, 32または2013, 42または2014, 42または2015, 44)。つまりこのことはカラオケランキング全体との関わりも、男女共に10代が最も高いことを意味する<sup>7</sup>。では、そのような10代の若者にとってランキング上位に位置するAKB48の楽曲を歌唱するという行為は、いかなる意味を持つのだろうか。換言すればAKB48の楽曲は彼らの中でどう位置づけられ、どのような要因で歌唱されているのだろうか。AKB48は当時様々なメディアで取り上げられており、その楽曲もテレビCM等に限らず連日様々な場所で耳にする機会は多かった。人気のあるアイドルだということを鑑みても、若い世代での知名度は高い。したがってAKB48が広く認知されていることと、その楽曲がカラオケで歌唱されることに何らかの関係性が疑われる。

例えば、宮台真司はカラオケでの若い世代の音楽享受<sup>8</sup>について、仲間と盛り上がりたければいいと捉え、実際カラオケボックスに行く場合には初めて紹介される友人が混じることもあって、自分だけしか知らない歌を歌うことは極力避けられるとしている(宮台・石原・大塚, 2007, 176)。吉井篤子も、そもそもカラオケの存在意味は、企業社会の人間関係の潤滑剤としての役割にあったとしている(吉井, 1984, 169)。この宮台と吉井の見解は、対象こそ若者と社会人という違いはあるものの、「カラオケで楽曲を歌う」という行為がコミュニケーションに利用されている点では共通している<sup>9</sup>。そのため宮台の指摘通り、歌唱する本人しか知らない曲を歌うよりは、広く認知された楽曲を歌うことは理に適っていると考えられるだろう。実際に鍛冶博之はカラオケに関する歴史的な記述の中で、歌唱する場合でもただ自分の好きな曲を選んで歌えば良いというわけでもない。カラオケ歌唱空間のその場の雰囲気に合わせて選曲する必要がある場合もある。いわゆる「空気を読む」ということがカラオケの選曲にも求められるのである。参加者が

J-POPで盛り上がっている時にアニメの主題歌や演歌を選択することは好ましい行為ではない。歌唱者には、皆と違う曲を歌い自身の個性を発揮し皆にアピールしたいという気持ちがある一方で、カラオケ空間全体の雰囲気や考慮を入れながら選曲することが求められる（鍛冶，2011，180）と和を重んじなければならない点を挙げる。もちろん鍛冶の指摘は、歴史的なカラオケの概説の中で、歌唱対象や歴史的時期を限定せずに一般的にカラオケの負の側面に言及しているので、最近の若者に限定して論じているわけではないと推察される点には留意したい。しかしながら、宮台と吉井同様に、カラオケボックスは複数の生活者が狭小な空間に集合することで生活者間の人間関係を構築もしくは促進する機能がある<sup>10</sup>点（鍛冶，2011，172）を指摘している。

実際に小泉恭子は、音楽によるコミュニケーションについて高校生を対象に調査を行っている。小泉は、高校生が日常的に聴いているパーソナル・ミュージック、カラオケで盛り上がるような世代共通のコモン・ミュージック、世代の異なる音楽教師とコミュニケーションを図るスタンダード・ミュージックという3つの音楽の種類を使い分けていること（小泉，1999，33）を明らかにし、高校生がパーソナル・ミュージックを学校やグループの中では隠していること、逆にカラオケなどの公の場でコモン・ミュージックを仲間と歌うことで、私的感情を超えた連帯感を確認していることを述べている（小泉，1999，45-44）。つまり高校生においてコモン・ミュージックと認識されている楽曲は、仲間との連帯感を高めるための媒介という点でコミュニケーションに利用されていると言える。更にはスタンダード・ミュージックも世代を超えたコミュニケーションに利用されていると捉えられるだろう。

一方で土井隆義は宮台や小泉とは異なり、カラオケは各自が好きな歌を勝手に歌い合っていれば参加者が時間と空間を共有できる場所であり、みんなで盛り上がるための場というよりも一緒にいる時間をやり過ごすための場であると述べる（土井，2009，20）。加えて鍛冶も、宮台や小泉と同様の見解を示した一方で、若年者のグループでカラオケをする場合、歌い終わった歌唱者に拍手さえない（鍛冶，2011，179）とマナーの問題を指摘する。そしてカラオケは一見すると複数の生活者がグループで入店し楽しむ集団的（団体的）レジャーであるが、実は意外に個人的レジャーとしての側面が強い。つまり、カラオケ歌唱空間にいる仲間集団は、皆で一体となってカラオケを楽しむというより、現在では歌唱者はマイクを独占して自分の世界観に浸って楽しむ。一方聴き手は、本当の意味での聴き手ではなく自分番が来るのを待つ待機者になり果てている。カラオケボックスの登場以降は特にこの傾向が加速し、マイクを持つ者だけがカラオケを真に楽しめるという状況をもたらしたといえる（鍛冶，2011，179）と土井と同様の見解を示している。この土井らの見解に基づいた場合、歌われる楽曲は自己目的的な歌唱に利用されるだけのコンテンツに過ぎない。むしろコミュニケーションに利用されているのは、楽曲ではなくカラオケという行為や空間であるため、これらの先行研究は相反するように感じられる<sup>11</sup>。

### 1-3 本稿の主旨と構成

だが一見相反しているかのように感じられるこれらの先行研究は本当にそのような対立構造を



持っているのだろうか。AKB48の楽曲をカラオケで歌うという行為を、先行研究に照らし合わせることで一度解釈してみたい。

小泉や宮台に準じるならばAKB48の楽曲はカラオケにおいてコミュニケーションに利用されているという仮説が成立する。翻って土井の見解では、カラオケという場所や行為がコミュニケーションに作用しているのであって、AKB48の楽曲は単に「歌いたい」という自己目的な理由で歌唱されるコンテンツに過ぎない。例えば宇野常寛は、AKB48のカラオケランキングでの高さを指摘しながら、人々は自分がカラオケで歌って楽しい曲を歌い、AKB48には音楽に参加する快樂がある（小林・中森・宇野・濱野，2012，97または99-100）と述べている。もちろん、音楽に参加する快樂がカラオケにあることはAKB48に限ったことではないため、その発言には懐疑的な点が顕著に見受けられるものの<sup>12</sup>、この発言はAKB48の楽曲の歌唱要因は関係性を志向したのではなく、土井同様に自己目的なものであることは窺わせるだろう。前述した吉井も、カラオケが企業社会での潤滑剤でありつつも、「当事者としての体験率」の高い、一般的なものとして捉えている（吉井，1984，168）。この記述からは、カラオケでは当事者性が重視され、その選曲は歌唱する本人の嗜好に左右されていたことが推察できるだろう。

だが吉井の見解は、ある楽曲を歌唱するという行為が、関係性の維持を志向することと、自己目的な歌唱を感じさせるものの両者を随伴しているようにも感じられる。つまり、こうした先行研究での違いは、実際には両者が二律背反なのではなく、むしろカラオケでの参加者の思いが複雑に影響した上で生じる状況依存的な現実を論じたものではないだろうか。だからこそ、鍛冶が両方の知見を示したのではないだろうか。実際に中西裕と玉木による10代の若者を対象にした研究において「気の張る相手」とのカラオケと、「気の置けない仲間」とのカラオケが存在し、若者はその2つを状況依存的に個人の中で使い分けていることが明らかになっている（中西・玉木，2015a，256）。したがって、ある楽曲、本稿で言うAKB48がなぜ歌唱されるのかという主たる要因を考察する上では、先行研究のどちらかに優劣はつけられうるかもしれないが、先行研究のどちらの見解が多数派となるかは、楽曲やアーティストそしてカラオケの構成員によっても異なってくる。そのため現状の材料だけではAKB48の楽曲の機能を解釈した場合に、先行研究のどちらの見解が真で、どちらが偽であるという明確な結論付けは困難であろう。

では実際にAKB48の楽曲はカラオケでどのような認識をされ、どのような要因で最も歌唱されているのだろうか。小川博司は、カラオケは歌を特定の歌手から、あらゆる人へと解き放ったと述べている（小川，1988，116）。だがポピュラー音楽研究の中では過去に中原ゆかりがハワイでの日本の歌を扱ったカラオケに関する研究のノート（中原，2006，143-152）は存在するものの、どのような文脈でカラオケを述べるにしても、ここまで見てきた先行研究が示すような日本の若年層の様相を具体的に示した実証的な研究は存在せず、その記述に関しては推察の域を出ない。したがって本稿では先行研究の見解やその対象を継承しつつ、その詳細を確かめるため、カラオケへの参加率が他の世代より高い主な10代男女である中高生を対象に調査を行う<sup>13</sup>。

なお本稿は4節で構成される。第1節では先行研究を基に本論の位置づけを行い、AKB48の

楽曲がカラオケにおいてどのような要因で歌唱されているのかという仮説を提示した。続く第2節では実際に中高生を対象に行ったアンケート調査の結果を提示しながら分析を行う。そして第3節では量的調査からは導き出せない要因を得るために行った質的調査を用いて、より詳細な考察を行う。そして最後に第4節では、本稿のまとめ及び今後の研究との関連について述べる。

## 2. 量的調査から得られる関係性志向

### 2-1 調査概要

先述した問いを明らかにするため、以下の条件で量的調査を実施した。なおこれらの調査内容の一部は、既に玉木(2022)でも用いており、2012年12月9日に武蔵大学にて行われた日本ポピュラー音楽学会、第24回大会にて「若者の友人関係維持に関する研究－カラオケの選曲を例にして－」という題目の自由研究発表で、発表している。

期間は2012年7月～9月。対象は愛知県在住の中高生。

総サンプル数1736、有効回答数1651、有効回答率95.1%。

有効回答の内訳は男子674人(うち中学生280人、高校生394人)。

女子977人(うち中学生211人、高校生766人)。中学校4校、高校10校の計14校。

当初県内の中学校と高校を無作為抽出し、電話や書面等で調査協力の依頼をしたが協力が得られず、再度筆者の知人で教員の方々を通してできる限り多くの学校にお願いするという形式をとった。しかしそれでも許可を得られた学校は少なく、「筆者と知人との責任の範囲内での調査に限る」という名目で何とか調査実施に至った。なかでも中学校は義務教育課程であるということもあって、筆者の友人を通して許可を得づらく、サンプル数は高校生に比べて少ない。調査及び分析を行う上で、対象が愛知県内に限られていること、またサンプルの偏りや完全なる無作為抽出ではないという点は考慮すべきだが、友人が持ち時間を使って直接回収に関わってくれたこともあり、中高生を対象にこれだけのサンプルが取れたことは研究上評価できるだろう。

なお10校の高校は、学業成績による階層の偏りが無いように上位層から4校、中位層から3校、下位層から3校の協力を得られた。なお学力階層に関しては愛知県高等学校偏差値ランキング<sup>14</sup>を参考に、偏差値60以上を上位層、59～50を中位層、49以下を下位層と設定した。だが上位層と中位層にそれぞれ女子校を2校含んでいるため、高校生は女子の人数が多くなっている。対して中学校は4校の協力を得られたが、どの学校においても1クラスに占める男子の割合が多かったため、全体的に男子の人数が多くなる結果となった。以下に質問項目を示した。

1. 友人とカラオケに行くか？(①はい、②いいえ)

2. カラオケでAKB48の楽曲を歌うか？(①積極的に歌う、②友人が入れたら歌う、③歌わ

ない、の3択)

3、歌う理由に関して以下の6項目をそれぞれ、①はい、②どちらでもない、③いいえ、の3択で評価。

- A、自分が歌いたいから。
- B、みんなが知っていそうだから。
- C、盛り上がるから。
- D、自分が歌いたい曲は歌いづらいから。
- E、みんなで歌いたいから。
- F、流行しているから。

学年、性別に関しては本稿では省略した。質問紙でもこの順で問うている。質問3のA～Fの質問順に関して、似たような質問をまとめて並べるべきではないかとの指摘も想定されるが、前後で類似した性質を含有した質問が重複することで項目が示す信憑性を失う可能性も考えられたため、ある程度無作為な順番に問うている。なお、各項目が含有すると考えられる性質に関しては以降の2-3にて詳述している。また実際の調査ではこれ以外の項目も盛り込まれているが、趣旨とずれるものもあるので、本稿で扱うもののみを表記した。例えば他の質問には「AKB48の歌詞に共感するか？」というものもあった<sup>15</sup>。

## 2-2 量的調査の結果と分析

では調査結果に関して分析を試みていこう。まずは中高生がどのような姿勢でAKB48の楽曲歌唱に臨んでいるのを確認するため「1、友人とカラオケに行くか？」の質問に対して、①はい、と答えた者1315人に対する「2、カラオケでAKB48の楽曲を歌うか？」の質問項目及びその回答と分析結果から記していく。図1の①～③は「2、カラオケでAKB48の楽曲を歌うか？」に対する質問項目の、①積極的に歌う、②友人が入れたら歌う、③歌わない、を簡略化して記した。

なお、中高生のどれだけが友人とカラオケに行くかという質問に対する分析は割愛する。理由としては本稿の趣旨から外れる点、そして質問1の項目自体が、サンプルの中学生と高校生の割合、男女比、調査時期、地域差等々によって変動する質問であった点が挙げられる。あくまで今回の図1での結果は、本稿における質問1の調査で得られた結果を反映したものであり、純粋に「中高生のどれだけが友人とカラオケに行くか」という普遍的な調査をすることは、調査時期、場所に関する質問枠組みの新たな議論を呼ぶことが予想される。実際に、本稿調査でのカラオケ経験率（友人とのものに限る）はレジャー白書の数値よりも全層において高かった。なお参考までに友人とのカラオケの経験率の高さは高校生女子、高校生男子、中学生女子、中学生男子の順であったことを挙げておく。この男女差や年齢差はレジャー白書の男女差や金銭面の問題を加味すれば妥当であろう。実際にカラオケ関係者によると金銭的理由から中学生よりも高校生の方が



カラオケに来ることが述べられている（ふく，2013，88）。

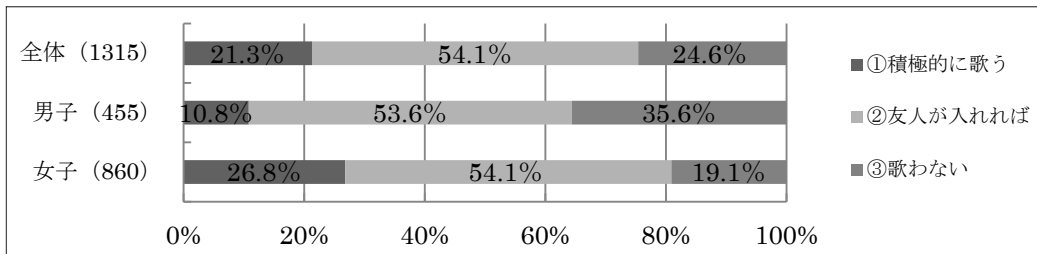


図1 AKB48の楽曲を歌唱するかどうか (男女別集計のカイ2乗値 69.012 p値 < 0.01)

図1から明らかなのは、今回調査を実施した友人とカラオケに行く中高生全体の75.4%がAKB48の楽曲の歌唱層であり、歌唱層と非歌唱層が3:1で構成されていることである。この比率に関して、単純にカラオケランキングへの貢献度だけを念頭に入れて分析しようとする場合、①積極的に選曲する層のみを分析対象にした方が適切であるとの指摘も当然考えられる。しかし先行研究の見解を継承してカラオケでは関係性を志向した要因で選曲がなされているという仮説を立てた場合には、②友人が入れたら歌う層の存在がどの程度存在するかという事実が、①積極的に選曲する層にとっては「みんなも歌っている」という認識に繋がり、選曲をいっそう促進する要素にもなる。よって②友人が入れたら歌う層も、積極的ではないが歌唱しているため、本稿では歌唱層であると位置づけて議論を進めることとする。

その一方で、本調査では元々女子のサンプル数が多いことに加え、友人とのカラオケを経験している人数も455:860と女子の方が多く、そのことが影響して図1のような人数比になっている点にも留意するべきであろう。もちろん調査時期以降のレジャー白書では、2013年版は男性10代51.0%、女性10代76.5%、2014年版も男性10代43.8%、女性10代58.7%となっている（日本生産性本部，2013，42と2014，42）。こうした点から男子より女子の方が頻繁にカラオケに行くことが明らかであるため、このような差異は蓋然的であろう。

そのことを鑑みて、図1は男女別クロス集計の結果も記した。その結果、女子の場合の歌唱層は80.9%であるのに対して、男子の場合は64.4%となり、男女差が歌唱の一つの要因であることが明らかになった。このことはAKB48が女性アーティストであることを踏まえれば当然の結果であると言える。実際にカラオケで歌唱する場合、異性アーティストの楽曲はキーが合わせにくいという点から男子には敬遠されやすいことが考えられる。だが永井純一は、本稿と同じく2012年の16歳から29歳の若者への量的調査を分析し、AKB48をはじめ、ももいろクローバーZ、モーニング娘。及び派生グループに代表される女性アイドルグループの男女別支持率が56.6%:43.5%だと示している。もちろんこの結果のサンプル総数が23であるため、あくまで参考程度であることには留意したい。他方でジャニーズ系男性アイドルへの男女別支持率は20.5%:79.5%（総サンプル数88）であった（永井，2019，79）。こうした結果から永井は、男性ファン

が異性のアイドルを応援しがちであるのに対して、女性ファンは異性のみならず同性アイドルも応援する傾向が強い（永井，2019，80）と述べている。この点も、サンプル数を踏まえればあくまで参考程度の知見であること、そして本稿と永井の分析対象との年齢差に留意する必要があるが、永井の論じる傾向が存在するとしても、そうした支持とカラオケでの歌唱はまた別次元であることも図1から示唆された新たな結果であると言える。

### 2-3 6項目の歌唱要因の評価

ただ、これだけではカラオケにおいて男女別でどの程度歌唱されているかが明らかになっただけで、その要因はわからない。そこで図1に記した①積極的に歌う、②友人が入れたら歌う、と答えた（今回の総サンプル全体の57.4%に当たる）歌唱層に、その理由（6項目）を尋ねて「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の3択で回答してもらっている。6項目のうち「A自分が歌いたいから」という理由は例えばAKB48自体が好きであったり、AKB48に対する評価は別にして、その楽曲が好きであるという自己目的な要因である。また「C盛り上がるから」や「Eみんなで歌いたいから」という理由は関係性を志向した要因だと位置づけられる。

一方で「F流行しているから」と「Bみんなが知っていそうだから」という理由は関係性を志向する性質を持つが、既述した2項目に比べるとその程度はやや低い。なぜならば「F流行しているから」という項目は、流行している曲を歌った方が他の参加者も楽しいのではないかという気遣いは見られるが、一緒に楽しんで歌ったり（みんなが楽しんでくれて）盛り上がったたりという積極的な行動を図ろうとしていない点では既述の2項目にやや劣るからである。また流行の曲を歌うという点では、流行を捉えている自分を演出し、そのことで会話の糸口を掴もうとしていることも想定されるが、これらはあくまで他の参加者が自分の歌をどう評価するかに左右されるため、関係性志向に消極的な行動であると言える。同様に「Bみんなが知っていそうだから」という理由も、知らない曲を歌うよりもその場の参加者が知っている曲を歌った方がいいのではないかという気遣いは見られるものの「全体での盛り上がり」や「みんなで」という集団参加性は含意されていないため、既述の2項目に比べてやや関係性志向に消極的な行動であると言える。

それゆえに「C盛り上がるから」や「Eみんなで歌いたいから」は最も関係性を志向した項目、「F流行しているから」と「Bみんなが知っていそうだから」は関係性を志向しつつも程度の弱い項目、「A自分が歌いたいから」の項目を自己目的な項目と位置付ける。

また「D自分の歌いたい曲は歌いづらいから」の項目も他の参加者からの視線を意識している点では関係性を志向していると言える。だが、そういった状況でAKB48の楽曲を選曲するには、例えば「選曲に困ったらAKB48を入れておこう」といったAKB48の楽曲のみが含有する特殊な意味が存在することが想定できる。したがって他とは異なった、AKB48の楽曲が歌唱される新たな要因を探る項目として位置づけ、調査を試みた。

以下の図2では、図1で①積極的に歌う、②友人が入れたら歌う、と答えた歌唱層と6項目とで2×3のクロス集計（各項目ごとにそれぞれクロス集計）を行い、「はい」という回答が得ら

れた割合（数値は％）のみをまとめて示した。なお図2の各項目は本節冒頭にて既述しているため、作図の関係上やや簡略化して表記した。全ての分析結果について1%水準で有意差があった。

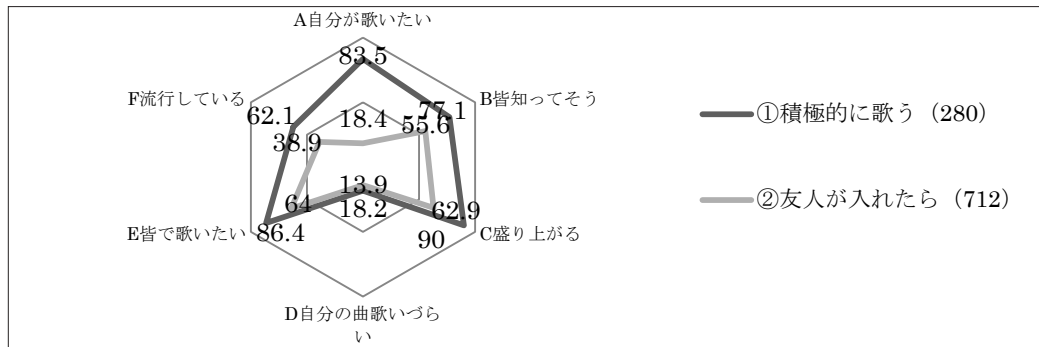


図2 歌唱層による歌唱要因6項目の評価

図2によれば、歌唱層による6項目評価のうちで高い数値を示したのは自己目的的な要因である「A自分が歌いたいから」（①の層では83.5%で3位、②の層では18.4%で5位）という項目ではなくて、関係性を志向した要因である「C盛り上がるから」（①の層では90.0%で1位、②の層でも62.9%で2位）と「Eみんなで歌いたいから」（①の層では86.4%で2位、②の層では64.0%で1位）という項目であることがわかる。もちろん、①積極的に歌う層にとっては「A自分が歌いたいから」のような自己目的的な理由も83.5%を示し、選曲の大きな要因にはなっているようだが、それ以上に、既述したCとEの項目の高さが際立つ。特に、②友人が入れたら歌う層に着目すれば、「Bみんなが知ってそうだから」（①の層では77.1%で4位、②の層では55.6%で3位）という項目の55.6%も含め、歌唱される要因の多数は関係性を志向している。

加えて①の層と②の層の差異に着目すると、そのような傾向が更に明確になるだろう。①と②の差が最も大きいのは「A自分が歌いたいから」である。このことは、自己目的的要因がAKB48の楽曲を①積極的に歌唱する層には大きく影響していて、②友人が入れた場合に歌う層にはさほど影響しないことを示している。つまり、AKB48の楽曲が個々の中でどう位置づけられているかによって、その歌唱傾向も変化することがわかる。

したがってここまでの量的調査からAKB48の楽曲は、自己目的的要因からの歌唱がありつつも、関係性を志向する要因が最大となって、中高生に歌唱されている傾向にあることが明らかになった。それゆえに仮説に則って考えれば、現代の中高生にとってAKB48の楽曲は友人とのカラオケでのコミュニケーションに利用されているとも言えるだろう。

加えて歌唱層による6項目評価からは、宮台が述べるような「みんなが知っていること」が加味されつつも、そのことが最大要因となってAKB48の楽曲が歌唱されているわけではないことも明らかとなった。「みんなが知ってそうだから」と類似した要因である「流行しているから」という項目は図2の①の層で5位、②の層でも4位であった。既述のようにAKB48の楽曲は毎

年 CD 売上ランキングの上位を独占し、ミリオンセラーを記録している楽曲が多い。そのため友人とのコミュニケーションに利用するために知名度を最優先するならば、話題性という点でもカラオケランキング上位に位置するもの以外の楽曲も歌唱されてもいいはずであろう。しかし現状では本稿冒頭で示した一部の楽曲のみが歌唱される傾向にあることから、必ずしも流行や売上が認知となるのではなく、あくまでみんなが知っているだろうという暗黙の認識や、みんなで歌えることを前提として、盛り上がるから歌うという段階的な選択がなされていると推察される。なぜならば、参加者が知らなければみんなで歌うことは不可能であり、盛り上がることもできない。

加えてその曲調にも着眼する必要がある。本稿冒頭で記したランキング上位を過去に獲得した AKB48 の楽曲は全てアップテンポの楽曲であり、最低 2 人以上で歌わなければ完全には歌唱できない。例えば『ヘビーローテーション』ではサビの部分を復唱するように「I want you! (I want you!) I need you! (I need you!) I love you! (I need you!)」と歌う。『フライングゲット』もサビの後半部分を「誰といても (誰といても)、微笑み方で (微笑み方で)」と同じく復唱するように歌う。『Everyday, カチューシャ』も A メロの部分を「海沿いの (海沿いの) 国道を (国道を)」と追いかけるように歌う。『ポニーテールとシュシュ』はサビを「ポニーテール (揺らしながら) 風の中」のように分割して歌う。『会いたかった』はサビで「会いたかった、会いたかった、会いたかった (Yes!) 君に」と合いの手を入れる。『恋するフォーチュンクッキー』もサビ後半の「(Fu ~) 人生捨てたもんじゃないよね」という掛け声がある。もちろん『恋するフォーチュンクッキー』が選曲される要因には、これ以外にも動画の影響やダンスの影響も考えられるため、一概に複数で歌唱できることだけが盛り上がる要素ではという疑義が今後の研究課題として挙げられるものの、こうした楽曲の構造も要因の 1 つとしては挙げられるだろう。

他方で他にランキング上位に位置した『365 日の紙飛行機』は朝ドラの主題歌ということもあり、更なる別要因での歌唱も考えられるが、調査時期には存在していない楽曲なので今回の分析には含めない。ただこのような楽曲的な特徴や認知も含めて、一部の盛り上がりやすい楽曲がカラオケで歌唱されているという結果が生まれていることが背景として推察できる。

### 3. 質的調査から得られる同調圧力と自己承認欲求

#### 3-1 量的調査結果から得られる疑義と新たな視点

しかしながら量的調査の結果を経て疑義が生じる。それは AKB48 の楽曲だけが、なぜ毎年こんなにも歌唱されていたのかという事実である。確かに、当時のカラオケ JOYSOUND の担当者も「みんなで盛り上げられる曲」を今のミュージックシーンのキーワードだと位置づけ、AKB48 を挙げてはいるが、同時に EXILE やゆずといった他の、ランキング上位に位置するアーティストも挙げている。そして担当者は、カラオケの参加者が掛け合って歌唱することで盛り上がる点を指摘していた (ふく, 2013, 88)。前述の通りカラオケランキング上位を記録した

AKB48 の楽曲もこの点に該当するが、他のアーティストも同様である。例えば、2013 年度カラオケランキング 1 位になり、後に『ヘビーローテーション』の記録を抜くことになった『女々しくて』にも、A メロでは合いの手として「あ～キャン様」というパートや、サビ後半で「女々しくて、女々しくて」が繰り返されるパートのように、2 人以上で掛け合って歌う箇所が存在することから、数人で歌えることで盛り上がるという要因だけでは、AKB48 の楽曲だけが毎年多く歌唱される要因や AKB48 を好きな層以外に歌唱される要因にはならない。

そこで、それらの疑義を解消するため、既述のように中学生よりカラオケに参加している高校生を中心に聞き取り調査を行った。調査は AKB48 の楽曲が歌唱される理由を明らかにすべく半構造化インタビューの形式を取り、なるべく自由な発言を促すために、インタビュアーも適度に雑談を交えている。ただ、調査及び分析を行う上でサンプルは愛知県を中心に東海地方に限られるという地域偏重がある点は考慮すべきではある。調査の詳細や質問等は以下の通りである。当然ではあるが本稿執筆に際して、録音と記載の同意を得ることで倫理的配慮をしている。

実施時期：2014 年 1 月～12 月

実施人数：22 組 41 名

実施対象：愛知県内の高校または予備校に通う東海地方の高校生の男女

記録方法：IC レコーダーを使用（記載同意済）

質問内容：AKB48 が歌唱される理由を聞き取ることを目的としつつも、それと気づかれないようにカラオケに関する問いをある程度行い、各自のカラオケに対する印象や過ごし方を問うた後に AKB48 の歌唱に関する質問を試みた。

ただ、このようなスクールエスノグラフィーの課題として小泉は、高校生が個々の嗜好を隠す傾向にあることを述べており（小泉、1998、35）、発言の正当性には疑義が付きまとう。したがって今回の調査対象は、筆者の勤務している非常勤先の高校や予備校の生徒達に協力を依頼した。筆者は日頃から授業や休み時間を使い、生徒達と授業内容以外の話も多く交わしており、年齢が近いことや常に接して口うるさく生徒達に生活面等の指導をしない距離感であることも相成ってラポール形成がされていると考えられるため、忌憚ない意見が期待できる。加えて、そのような意見をいっそう引き出すため、筆者は畏まった口調を使わず、いつも通りの口調で質問を試みている。

以降では、それらの結果を基に AKB48 の楽曲が歌唱される要因について更に考察するが、紙幅の都合上全てのインタビューやその全容を掲載できないので、必要なサンプルとその箇所のみを抽出し、本稿の問いの答えに対して核心的な材料と部分には下線部を施した。本稿で扱う CASE は全て AKB48 のことを特段好きではないが AKB48 の楽曲をカラオケで歌うという自己目的的な歌唱要因以外の見解を示したインタビューの中から、最も詳細にその要因を説明してくれているサンプルを選んだ。本稿で扱わないインタビューの半数以上は AKB48 自体やその

楽曲が好きで歌っている者や、今回記載するCASEと同列ではあるものの、記載したCASEに比べて説明が不十分であると判断したサンプルであった。

なおインタビュー中の筆は筆者（玉木）を示す。分析においてインタビューイの発言は、ある程度インタビューアの存在に影響されている可能性も考慮に入れて分析する必要はある。

### 3-2 質的調査の結果と分析

#### CASE1 雰囲気作りのための歌唱

聞き取り対象者：愛知県名古屋市内の私立女子高校2年生の女子2名

聞き取り年月日：2014年7月28日、夜の授業前に17時半から20分程実施

AとBは筆者が勤める予備校の生徒であり、同じ学校の友人同士ではあるが、一度一緒にカラオケに行ったことがある程度だと言う。Aは上下関係の厳しい運動部に所属しており、口調が丁寧ではあるが思ったことを素直に言葉にするタイプであるが、Bほどカラオケには行かないようだ。それに対してBはカラオケが好きで頻繁に行くようであり、他の先生からの印象は内気で言葉数の少ない印象であるが、筆者に対しては比較的心を開いているようで、普段から授業に関する質問も含め、雑談等の問いかけには友達感覚で多く言葉を返してくれる。

筆「で、2人はどんな曲を歌ったりするの？」

A「私は洋楽とか、あと男の曲とかですかね。」

B「私は、割と何でも歌うかな。」

筆「Aは他には何か歌わないの？」

A「あ、百恵ちゃん。山口百恵ちゃんとか、古い歌ですかね。私、声低いんで、男の歌とかしか歌えないんですよ。だから昔の歌って割と低くて歌いやすいじゃないですか」

B「え、Aそんなこと無いじゃん！宝塚とか歌うし（笑）」

筆「はは（笑）じゃ。とりあえずAは自分が歌いたい曲とか歌える曲をどんどん歌っていく感じなんだね。」

A「そうですね。もう、歌うだけです。何か、ガンガン入れて、歌う、みたいな。」

筆「みんなで歌おうかと思わないんだ？」

A「そうですね。もうみんな淡々としてますよ。」

筆「なるほど、Bは？」

B「あー、私は気遣うかな。」

A「え、そうなの？何でも歌ってたじゃん。」

筆「じゃ、例えば何歌ったりするの？」

B「今流行ってる歌？とりあえずみんな知ってそうなやつ。あんまり、みんなが知らないの歌っても冷めるし。」

筆「そうなんだ、2人はアイドルとかは歌わないの？例えば、嵐とか、AKB48とか」



A「あー、まぁ好きな子がいれば歌いますね、その子が。」

B「嵐は歌う子多いかな、好きな子いるし、でも私も AKB48 とか歌うよ、2, 3 曲目に！」

筆「2, 3 曲目？ そうなんだ、じゃ、1 曲目は？ 何で 2, 3 曲目なの？」

B「何か、1 曲目は、いつも、誰が歌う？ とか、何歌う？ とかなるから、とりあえずみんな知ってそんな歌？ 流行ってるドラマの主題歌とか？ それ歌って、何か、掴み？ みたいな、それで、次に AKB48 入れるかな、みんなで歌えるし、場が和むじゃん、そうするとみんな歌い易いし、何か、あんま一人で歌うのもアレだし。」

筆「なるほど、A はそういうの気にしないの？」

A「気にしないでですね、そういうメンツでしか行かないし、もう歌うだけなんで。」

筆「そうなんだ、じゃ B に聞きたいんだけどさ、何でそこで AKB48 を歌うの？」

B「うーん、まぁそれこそみんな知ってるし、盛り上がるし、せっかくみんなで来てるから、みんなで歌った方が楽しいだろうし。」

筆「そこで〇〇<sup>16</sup>（某アイドルグループが入る）とかは選択肢に入らないの？」

B「あ、歌う歌う！前はよく歌ってた、流行ってたし。」

筆「でも今は歌わないの？」

B「あ、そうだ、ね、何か今はちょっと古いし、なんだかんだ AKB48 ってコンスタントに売れる新曲出してるし、それだとみんな歌えるし。」

A と B はカラオケのタイプとしては対極なケースであるが、2 人による AKB48 楽曲の歌唱に関する発言からは量的調査の結果を裏付ける重要な示唆ができる。まず A は先行研究で土井が述べていた「各自が好きな曲を歌い合うカラオケ」を経験しているようであり、そこで AKB48 が歌唱される場合は、AKB48 を好きな参加者が各自で歌うという自己目的の歌われ方をしてい

る。対して B はカラオケ好きで頻繁に行くにも拘らず、先行研究で宮台や小泉が述べていたようになるべく参加者が知っている曲を歌う傾向にあり、その時に好んで選曲する曲が AKB48 の楽曲であると言う。B は前節での量的調査の結果通り、みんなが知っていて、みんなで歌えることを前提にして AKB48 の楽曲を選んでいるが、そこには「和む」という表現で示されるよう、カラオケという場の空気を参加者にとって居心地の良いものに整えようとする意図が見受けられる。つまり一種の洗礼として AKB48 というみんなで歌いやすい曲を歌うことで、その日のカラオケで誰もが歌いやすい空気を作り出すことを意図しているようだ。おそらく B が「和む」と言った表現は、量的調査における「盛り上がる」という項目と同等であると考えられ、そうすることによって楽しいカラオケが展開されるのであろう。

加えて、B は量的調査には無い新たな知見を提示してくれる。AKB48 はコンスタントに売れる新曲を出しているという B の発言は、AKB48 の楽曲だけがなぜ多く歌唱されるのかという問いに対する 1 つの答えになっている。確かに人気アーティストは多々存在するものの、毎年コン

スタントに年間CD売上ランキング上位を独占する女性アーティストは他にいない。それが結果的に若者の認知を呼び、前節終盤で記した通り、その中から盛り上がりそうな楽曲が選択され、多くカラオケランキングに名を連ねる結果が生じていたと考えられる。つまりこれらのBの発言から、AKB48は当時、盛り上がって楽しいカラオケを過ごすため、みんなで歌いやすい曲を最も多く有しているアーティストであるという認識を彼女達から受けていたと言える。

他方でAが、好きな子が歌うという自己目的的要因でのAKB48の選曲を発言していたことに対して、Bは「気を遣う」や「一人で歌うのも」という発言をしていた。もちろん前節で述べたようにAKB48の歌唱は自己目的的要因がありながらも関係性を最も志向しているという両見解とも間違いではないという量的調査の結果とも合致する。だがここには昨今の青少年の関係性維持への過剰な気配り(土井, 2008, 27または34)に関連するメカニズムがあるようにも感じられる。したがってその考察を行うため、次の聞き取り調査を参考にしたい。

## CASE2 同調するための歌唱

聞き取り対象者：愛知県内の高校3年生の女子2名と男子1名

聞き取り年月日：2014年11月15日, 13時10分から30分程, 昼食を共にしながら実施。

3人は予備校で会うだけで別々の高校に通う間柄である。Cは礼儀正しい男子であり、Dは筆者に対して無礼なことも明確に意思表示をする女子。Eの女子はやや控えめで言葉数は少ない。

筆「じゃ、何でAKB48を歌うの？」

D「まあ、みんな知ってるし。そういう歌の方がいいでしょ。」

C「盛り上がりますよね。」

E「私は好きな子がいたら歌う感じかな。ボカロとか、アニソンとか。そういうのも同じ。空気読んで。」

筆「例えば、みんなAKB48が好きなわけじゃないんでしょ？みんなで歌うとか気にしないで、自分が歌いたい曲歌えばいいんじゃないの？」

C「いやいやいや！」

D「てか、カラオケってそういう場じゃないし。だったら初めっからヒトカラ<sup>17</sup>行けて話じゃないですか？それこそ空気読めよって感じ。」

筆「なるほど。でもそこでどうしてAKB48の曲を歌うの？○○(某バンドユニットが入る)とか○○(カラオケで人気の曲目)だってあるじゃん？」

D「○○(バンドユニット)は確かにいいけど、そこまでみんなが知ってるほど有名って曲無いじゃないですか？それに○○(人気曲)は確かに歌うけど、それだけでしょ？それだったらやっぱりAKB48の方がみんな歌える曲多いし。」

C「AKB48の曲って、割と、サビとタイトルってイメージしやすいじゃないですか。だからみんな知ってるってうか。」

<中略>

筆「なるほど。じゃ、やっぱりみんなが知ってる、とか盛り上がるっていうのは大事なんだね。ちなみに知ってるっていうのは、予想を立ててるの？確認は取らないの？」

C「まあ、そうですね。割と。」

E「これ一緒に歌おう？とか言う時もありますけど、誰か知ってるよね、って感じで入れる方が多いですね。」

筆「それって確率論？みたいな？だったら逆に、あえてレアな歌とか歌って、え、お前？それ好きなの？みたいな感じで仲良くなることだってあるんじゃない？」

C「まあ、無いとは言えないですけども、それこそレアだし、レアな歌で盛り上がっても、他の人からしたら、アイツ等何？って感じじゃないですか。」

D「何かそこでレアな友情形成されてもね、みんなで楽しむ場だし。」

筆「だから一番みんなに受け入れられそうなものを選ぶんだ？」

C「はい、友達減らしたくないなら。」

筆「そんなことで友達減る？関係なくない？」

D「減るっていうか、アイツなに？とか思われるのは絶対あるでしょ。変わってるなあ、みたいな。」

C「そういうのはなるべく避けたいですからね。」

E「その後、周りの態度とか変わったら嫌だし。もう呼ばれなくなるかもしれないし。」

この3人の発言は、気遣いをする青少年のカラオケでの様相を鮮明に示している。まずCのAKB48の曲はイメージしやすいという発言はCASE1のBが示唆したAKB48の楽曲が選ばれやすい理由と同列であると捉えられる。イメージしやすく口ずさみやすい楽曲を多く有していることは、やはりコンスタントにそういった曲を出していることに加えたAKB48の特徴なのであろう。少なくとも、そのような認識を彼らのような若者からされていることはAKB48が多く歌唱されている要因であると言える。

そして特筆すべきはDが「カラオケでは他の参加者に対して同調することが当然だ」と考えている点である。CやEも当然のようにDの意見に対して同調しており、彼らにとってカラオケとは他の参加者に合わせる場であり、そのためには他の参加者に受け入れられそうだと彼らが認識しているAKB48の楽曲を歌うのだと言う。そしてそうすることによって場の空気を良好にして、和を形成しようという意図が感じられる。この点もCASE1でのBと類似した傾向であり、良好な雰囲気形成がAKB48の楽曲を選択する要因の1つになっている点が確認できるだろう。

だがそれだけでは留まらず、彼らの発言には更なる意図も見受けられる。それは彼らがカラオケにおいて「和を重んじる自分」「声をかけやすい友好的な自分」を演出することで、参加者との関係性を良好に保とうとしている点だ。そしてCとDの発言からはそのような自分を演出す

る時に、他のアーティストに比べて最も効果的な選曲となるのがAKB48の楽曲であると看取できる。実際に「友達が減る」や「後々呼ばれなくなる」、「レアな歌で盛り上がりても」といった発言からは、量的調査にあった「好きな曲を歌いにくい」とまでは言わないまでも、カラオケで異質な存在になることへの不安からマジョリティへの同調圧力を感じ、ある程度場を盛り上げて楽しい空気を作らねばといった強迫観念も垣間見える。つまり彼らにとっては楽しい雰囲気や和を形成することがカラオケでの第一目的なのである。Dの「それならヒトカラ行け」という発言は、盛り上げている自分、みんなの和を重んじている自分を参加者にさり気なくアピールすることで、友人との関係性を良好に築いていきたいという意図が表出したものであると受け取れる。

他方でEやCの発言からは、このようなAKB48の選曲は、あくまで「知っているだろう」という予想に基づいて行われており、それはある意味で青少年特有の空気の読み合いと同様であると言える。実際に中西と玉木による調査からは、カラオケの選曲の流れをUNOに例えている様相が明らかにされ、それを踏まえて、カラオケとはそのセンスを交換し合うゲーム(中西・玉木, 2015b, 80)だと表現されている。したがって、カラオケの選曲にはポピュラー音楽に関する豊富な知識や教養が必要でありながらも、その場の参加者によって構成される一時的で小さなコミュニティで共有される価値基準が優先されるため、その判断は常に一定ではないため必要とされる知識や教養も多様である(中西・玉木, 2015b, 78)とも言及されている。そしてカラオケの場で何より優先されるべき一座の調和を乱す危険性を避けるために、今がそういう場であるかどうかを敏感に察知することが彼らにとって重要な能力である(中西・玉木, 2015b, 78)と注意喚起までされている。鍛冶も、いわゆる「空気を読む」ということがカラオケの選曲にも求められる(鍛冶, 2011, 180)と指摘しながら、歌唱者には、皆と違う曲を歌い自身の個性を発揮し皆にアピールしたいという気持ちがある一方で、カラオケ空間全体の雰囲気を考慮に入れながら選曲することが求められる(鍛冶, 2011, 180)

このように空気を読んで盛り上がる楽曲を選ばなければならないため、それを外さないためにも、受容される可能性が高いと認識されているAKB48の楽曲が選曲される傾向にはあるようだ。なぜならば受容されないであろう選曲をした場合には「変わっている人間」というレッテルを貼られ、後の友人関係にマイナスの作用をしてしまうことを彼らが危惧しているからである。中西と玉木も、流れを崩した罪悪感(中西・玉木, 2015b, 77)について挙げている。

もちろん実際にマイナスに作用するかどうかは彼らの予測であるため定かではないが、少なくとも彼らは「盛り上がるから」AKB48を歌うのではなく、「盛り上げるため」に歌うと言えるだろう。量的調査ではこのような同調圧力との因果関係でAKB48を歌唱している層を峻別できず、全て「盛り上がるから」という項目に含まれてしまっていたが、このような層にとって「盛り上がる」という作用はAKB48を歌唱した結果ではなく目的となる。したがって彼らにとってAKB48を歌唱することは、宇野(小林・中森・宇野・濱野, 2012, 97または99-100)が述べていたような快樂とは程遠く、その正反対となる涙ぐましい努力になっていることがわかる。

またこのインタビューの後、昼食時を過ぎても3人の間で議論が交わされていたようであり、

その日の授業の終わりに C が再び 1 人で話をしに来てくれた。そしてその C の発言が関係性志向をしている青少年の心情を端的に記しているのので、分析してみたい。

### CASE 3 自己承認のための歌唱

聞き取り年月日：CASE2 と同日（授業後の 20 分間）

C「何で AKB48 歌うか？って聞かれたら、みんなで歌いたいからだと思うんですよ。」

筆「それは昼も言ってたよね。そうそう、C はさ、歌ったりするの？フォーチュンクッキーとか（笑）男で歌う奴っている？」

C「いや、僕は友達が入れたら程度ですけど、まっクラスで盛り上げ役っていうか、調子乗ってる奴は歌いますよ。」

筆「それはあえて歌ってるの？」

C「まっ、彼なりに盛り上げようとか、笑いを取ろうとして歌ってるんじゃないですか、それこそネタ的に。」

筆「ネタか。それで盛り上がるの？」

C「まっそれなりには、笑いは起きますしね。男が歌うと、逆に盛り上がることもあるし。てか、カラオケ自体仲良くなるチャンスじゃないですか。僕あんまりクラスの集まりとか行かないんですけど、やっぱり行ったからにはなるべく和を大事にしたいですし。」

筆「カラオケで仲良くなるんだ？でも、そんな一緒に歌うくらいで簡単に仲良くなれるの？」

C「いや、まっ、そんなすぐには無理かもしれないですけど、後で話しやすくなったりとか、共通の思い出があると、何か一体感みたいなのが出て、次の日とか、会社とかでもそうなんじゃないですか？あと、やっぱりみんなで来てるのに、一人で歌うのってどうかと思いますよ、わーって歌って、ふう、みたいな。」

筆「ストレス発散するじゃん？それに、それって仲良くなった気になってるだけじゃないの？実際にそこで心通じ合ったわけじゃないし。」

C「そうかもしれないですけど、気持ちの問題じゃないですか。アイツ、昨日盛り上がってたなとか、だって淋しいですよ、自分歌って、誰も声かけてくれないとか。」

筆「ひょっとして、歌聞いて欲しいの？かまって欲しいの？」

C「いや、そういう訳じゃないですけど、でも、みんなで来てるのに、一人で歌って、チーンってなってるのって嫌ですよ。」

これらの C の発言は AKB48 の楽曲を進んで歌唱する者達の心情を非常にわかりやすく示している。まず触れたいのは、その場だけではなく、後の関係形成にも役立たせるために、カラオケで良い印象を残そうとしている点である。CASE 2 でもあったように、明らかに彼らは話しかけやすい友好的な自分を演出しようとしている。そのような行為で会話の糸口を作り、コミュニ

ケーションを深めようとしている。換言すればカラオケで盛り上がるという行為は、参加者との絆を形成し、深めたい彼らなりの手法なのであろう。

そして何より着目すべきは「淋しい」という発言である。明らかにここには、絆を深める以上に、歌っている自分を受け入れて欲しいというCの思いが見て取れる。つまり同調圧力からAKB48を歌唱している者の根底には、こうした自己承認欲求が存在しているようだ。もちろんカラオケにおいて他の参加者に自分が歌っている曲を聞いてもらい、肯定的に受け入れて欲しいと思うのは自然であり、それはどの曲を歌っても同じであろう。だがCの発言は、青少年の承認欲求がAKB48を選曲させ、そして友人に同調して歌わざるをえない状況を作り出しているようにも感じさせる。そう捉えると、男子でもAKB48を敢えて歌うという行為は、自分を印象に残して欲しい、少なくともこの場で孤独を感じたくないといった切実な思いの表出にも受け取れる。Cはそのような人物を「調子に乗っている奴」と表現していたが、実際にはその人物も、まるでピエロのような振る舞いをする中で、参加者にその場やその後も自分と関係して欲しい、どのような形でもいいから自分を受け入れて欲しい、と願っている淋しさを抱えた人物である可能性もあるだろう。例えば、本田由紀が中学2年生を対象に行った調査の中で「クラス内で自分の気持ちと違っていても人が求めるキャラを演じてしまうことがある」という設問に関連して、キャラを造って人間関係を維持している層があることを明らかにしている(本田, 2011, 55)。そのような行為は関係性維持や承認欲求から生じているのだが、「調子に乗っている奴」もそれゆえにAKB48の歌唱をしている可能性もあると考えられるだろう。

### 3-3 質的調査から得られる知見と結論

以上の分析からAKB48の楽曲が関係性を志向して歌唱されている背景には、カラオケという場の良好な雰囲気形成、そのような空気を作り出す自分の演出、そしてそのような振る舞いによって自らを受容してもらおうとする他者への承認欲求が存在していることが明らかになった。もちろん量的調査の結果にもあるように、単に歌いたいからAKB48を歌うという中高生も多く存在することも事実であろう。しかしながら、それ以上にAKB48を中高生が歌唱する背景には、こうした若者の他者への承認欲求や同調圧力が存在する。CASE1のBらの発言を踏まえれば、そのような若者にとってAKB48というアーティストが、当時は最も関係性を維持したり形成したり自己承認を得るための要素を含んだ楽曲を多く持っているアーティストだと認識されており、その結果、ランキング上位に名を連ねていたという結論が導き出せる。そしてそのようなカラオケでは、AKB48の楽曲は「盛り上がる」ということを目的とした手段として若者に用いられていたと帰結できる。



## 4, おわりに

### 4-1 本稿から得られた知見とまとめ

本稿では中高生を対象に AKB48 の楽曲が多くカラオケで選曲される要因について考察した。量的調査からは AKB48 の楽曲が自己目的的な要因がありながら、それ以上に関係性を志向して歌唱されており、そのために知名度等は加味されつつも、盛り上げられる性質を有した楽曲が選曲されるということが明らかとなった。そして質的調査からは、そのような関係性志向の裏には中高生の承認欲求等が存在することが明らかになった。したがって AKB48 の楽曲は、AKB48 やその楽曲が好きな者にとっては好きだから歌う、そうでない者にとっては自己承認や関係性の維持形成のために歌われていた楽曲であったと位置づけることができる。結果そのような自己目的的な要因以外からの歌唱も相成って、ランキングに多く名を連ねた事実を生み出していた。

加えて AKB48 の楽曲が自己目的的要因よりも関係性志向的要因から歌唱されることに関連して、本稿 1-2 で述べたように先行研究のどちらかが真か偽かという議論ではなく、それぞれが個人個人にとってのカラオケの異なった状況を切り取っていたものだったという知見を導いた。

本稿での結論は、宮台や小泉が述べていた知名度重視という点では異なるが、カラオケにおいて関係性維持を志向した楽曲が選曲されているという点では同義ではある。例えば CASE 1 の B そして CASE 2 と CASE 3 はこの点に該当する。だが一方で気遣いをしないという CASE 1 の A のような存在は、そのような宮台や小泉と同列の知見だけが真ではなく、土井や鍛冶の知見もまた成立するという複雑な青少年の状況も明らかにした。例えば CASE 1 での A にとって、カラオケは気を遣う場所ではなく、淡々と自分の歌いたい楽曲を歌唱する場であった。もちろん A も時には気を遣う場面もあるのかもしれない。だがそのようにカラオケという場所自体が含有する意味は、カラオケに参加する個人の価値観や嗜好、その参加者との関係性によって変化することが示唆できるだろう。したがって土井が述べる、カラオケがかつてのようにみんなで盛り上がる場とは変化している（土井, 2009, 20）という見解は、楽曲を歌唱するという点だけを鑑みれば、気を遣わなくてもいいと感じる個人や、そのような参加者との自己目的的なカラオケを描写したものであったと帰結できる。なぜならば、カラオケに行くという行為自体は関係性を志向したものであり、また既に気を使う必要が無いほどの関係性が形成されている可能性もある。

他方で本稿の結果からは、小泉の 3 層構造理論において、ある曲（本稿で言う AKB48 の楽曲）が、パーソナル・ミュージック、コモン・ミュージック等どれに分類されるかは個人によって異なるということと共に、隠すはずのパーソナル・ミュージック（小泉, 1999, 45-44）、つまり本稿で言う AKB48 を、人によってはカラオケで積極的に歌っているという状況も明らかになった。なぜならば「歌いたいから」という歌唱理由は、AKB48 がパーソナル・ミュージックに位置していることが推察されるが、量的調査によれば、そのような歌唱理由もかなり多かった。こういった現象の背景には、やはり AKB48 の広い認知度や、本稿で言及した楽曲構造もあり、パー

ソナル・ミュージックでありながらも、コモン・ミュージックでもあるため、隠す程ではないという位置づけになっていたことも推察される。つまりパーソナル・ミュージックの中にも、隠すべきものと隠す必要のない楽曲があるということが示唆できる。

このことを敷衍して考えれば、AKB48の楽曲は熱烈なファンにとってはパーソナル・ミュージックであり、そうではない若者にとってもコモン・ミュージックであり、そして彼らが歳を重ねた現在ではスタンダードとなっていると推察されるため、その世代にはいっそう歌唱される楽曲になるのかもしれない。したがって一口にカラオケで、ある曲を歌うと言っても、その場の参加者構成や時期、個々のカラオケへの参加目的等によって、常にその意味合いは変化するということが示唆できる。そのため3層構造は常に明確な線引きができるものではない。本稿においては、小泉が「隠す」と述べたパーソナル・ミュージックであるAKB48も、積極的に歌唱されているように、その性質も個人や集団によって異なり、個人の中でもその分類は普遍的なものではないという点も本稿の結論には含意されるだろう。

#### 4-2 今後の研究課題

最後になるが本稿での結論は小川が、カラオケは「新奇性」の支配するヒット曲の生産・消費システムの一部を担うと共に、スタンダード<sup>18</sup>を選び出すフィルターとしての役割も果たしている（小川、1988、116）と指摘していたこととも関連する。つまり、こうしてAKB48の楽曲が他者への承認欲求からもカラオケで歌われている事実を生産及び流通プロセスに位置する者が認識し、それをAKB48の活動やアイドルとしてのキャラクター構築そして楽曲制作に反映させることが考えられる。例えば「打ち解けてない友人とのカラオケの一曲目はこの曲！」のような売り文句によって、楽曲をプロモーションしたり、そもそもそれに適した楽曲を制作することが挙げられる。実際に、『恋するフォーチュンクッキー』（2013）のヒットの裏側には、親しみやすい振付の浸透や、それをカラオケやSNS等で再現することを試みたことが想定される。AKB48の後にカラオケで人気となった楽曲の中には、星野源の『恋』（2016）、DA PUMPの『U.S.A.』（2018）、NiziUの『Make you happy』（2020）等があり、このような楽曲は、そうした消費と流通を想定して意図的に制作した楽曲の実例としても挙げられるかもしれない。

そういった点では、AKB48よりも以前にブームとなったモーニング娘。の楽曲も同様の位置づけであったのか、それともその頃の若者には本稿で示したような同調圧力は存在しなかったのかという疑問も喚起される。そしてそれ以前の小室ファミリーブームや、そもそもカラオケランキングへの着目がそれほどなされていなかったいっそう過去の時代における若者と、カラオケで歌唱される楽曲の詳細な関係性はどのようであったのだろうかという疑問さえ五月雨式に浮上する。JOYSOUNDのランキングを基にすれば、モーニング娘。は2000年のカラオケランキングにおいて5位に『LOVE マシーン』、7位に『恋のダンスサイト』、そして8位に派生ユニットである『ちょこっとLOVE』の3曲で年間トップ10に3曲をランクインさせるという記録を残している。しかし、やはり単独名義で3曲ランクインさせる難しさを感じざるをえない。なお年間

カラオケランキングトップ10に3曲を送り込んだアーティストは、過去30年においてAKB48の他には1999年の宇多田ヒカルによる1位の『Automatic』、2位の『First Love』、9位の『Movin' on without you』だけしか存在しない。ただ、そんな宇多田ヒカルと本稿で言及してきたAKB48を超える記録として1998年のGLAYが4位の『HOWEVER』、7位の『誘惑』、8位の『SOUL LOVE』、9位『ずっと2人で…』の4曲をランクインさせている<sup>19</sup>。宇多田ヒカルとGLAYは、当時アルバム売上で話題になり、AKB48同様に様々な社会現象を起こしたことが記憶に残る。こうした点を考慮すると、「コンスタントに売れる新曲出してる」というCASE1のBの発言にもあるように、やはりブームであるという認識が若者のカラオケでの選曲の心理に作用しているのだろう。ただ、こうした過去の様相に関連した若者の心理状況は、最早現在では明らかにすることは不可能でもある。そのため本稿で明らかになった理由から、2010年代前半においてはAKB48が多くカラオケで歌唱されていたという事実を皮切りに、今後のカラオケと若者の関係性が問われていくことがなされれば幸いである。それがCDの売れないこれからの時代の新しい音楽消費の指標を作り出す可能性もあろう。本稿で扱ったAKB48は関係性志向が最も主たる要因であったが、カラオケランキングでの上位に位置するアーティストごとにカラオケでの歌唱要因はそれぞれ異なることも推察される。例えば、2022年現在にランキング上位に位置する優里の『ドライフラワー』や、連続1位の記録を所持する米津玄師の『Lemon』は本稿で分析したAKB48の楽曲とは曲調も曲構造も異なるため、カラオケでの人気には別の要因があろう。そのため小川の著述を踏まえれば、今後このようなカラオケに関する研究がAKB48を取り巻く生産及び消費システムはもちろん、それ以外のアーティストや新たなアーティスト及び楽曲の制作に役立つことも期待できる。ただその一方で、鍛冶は小室哲哉を例に挙げながら、1990年代には、ヒット曲を生み出す条件として、多くの若年層にカラオケで歌唱してもらい、実際に歌ってみて上手く聞こえることが重要な意味を持つようになった（鍛冶、2011、184）とカラオケを前提にした生産システムの問題点を既に指摘している。鍛冶によれば、小室に代表されるこうした楽曲の大量生産と大量消費は、楽曲の均一化と画一化を進め、音楽が持つ芸術性を大きく犠牲にした（鍛冶、2011、184）とされるが、こうした過去の判例を踏まえて、今後の音楽制作がどのようになされていくか、それと関連した研究をなされることが今後の課題であるだろう。

他方で、本稿ではAKB48の楽曲を例にして、中高生が他者への承認欲求からカラオケで関係性を構築しようとしている様相を明らかにした。しかしながら、元々良好な人間関係が構築されている集団の場合とは違い、あくまでカラオケでの楽しい時間の共有は関係形成の一助に過ぎない。換言すれば、そこでの盛り上がりの共有をその後も維持できるかどうかは、また別の問題となることが含意される。実際にZ.パウマンによれば、例えばこのような一時的な連帯感をパウマンは「祭り（カーニヴァル）のきずな」であって、それを形作るコミュニティは「祭り（カーニヴァル）コミュニティ」（パウマン、2008a、101）だと称している。パウマンはこうした様々な一時的コミュニティのことを総称して、「美的コミュニティ」と呼んでおり、その別名を、非

常に多くの人々が、個人的に経験し、また個人的に対処している心配事や関心事を、しばしばそこに掛け、間もなく外され、また別の所に掛けられるという様相から「ペグコミュニティ」(バウマン, 2008a, 100-101) だとしている。更にバウマンは、怯える個人が不安を、たとえ一時的にしる脱ぎ捨てて、引っ掛けておける個用「掛け釘(ペグ)」のついた、集団的コートスタンドを用意すること(バウマン, 2001, 51)という形容表現によってペグコミュニティを説明しながら、芝居好きの人間が自分のコートを掛けるように、1つの部屋に自分の悩みを引っ掛けておく「クロークルームコミュニティ」(バウマン, 2007, 61-62)とも称している。そして、これら美的コミュニティの例として、「ポップ・フェスティバル、サッカーの試合、流行に乗り、話題を集め、人々が押しかける展覧会」等々を挙げ、「やがて溶けるように消えてしまう」(バウマン, 2008a, 100)とその存在を揶揄する。

バウマンは詳細に、そうしたコミュニティは、中心に位置するものが何であれ、参加者の間に生まれる絆が一時的なものであるのみならず、表面的でいい加減な性質を持つということを経験し、脆く儂く、希望次第で断ち切れることが予め了解されて含意されているために、結ぶことで不都合が生じることはほとんどなく、懸念もほとんどもしくは全く生じないとされる。そのため、支持者の間に倫理的責任のネットワークを形成することは断じてない。したがって長期の関与を伴うネットワークがそこに形成されることもない。美的コミュニティの劇的に短い生命の間に結ばれる絆はどんなものであれ、本当の意味での拘束力を持っていない。それは事実上「結果に責任が伴わない絆」なのであり、人間の絆が本当に大事になる時、すなわち人間の絆によって個人の資質や能力の不足を埋め合わせる必要が生じる時には雲散霧消する(バウマン, 2008a, 101)ということ述べている。ペグコミュニティに関しても同様に、それぞれの場所において、「かけ釘」共同体、すなわち多くの孤独な個人達が孤独な個人であることによって生じる不安を引っかけるためのかけ釘の周りに一時的に集まったものでしかありえなくなってしまう(バウマン, 2008b, 71)と憂慮している。また、脆弱で短命な共同体でしかなく、そこではある目標から他の目標へと不規則に狙いを変えながら、安全な避難所を求めて永遠に終わることのない探求があるだけ(バウマン, 2008b, 71)と、その脆さと際限の無さについても説明している。つまり中高生が「あの時はカラオケでAKB48を歌ってみんなで盛り上がったはずなのに…」と後に人間関係の維持が困難になることも状況によっては想定されよう。

実際に永井は、コモン・ミュージックは、確かに会話の糸口やカラオケでのレパートリーにはなるかもしれないが、実は友達作りに貢献しているとは言えない(永井, 2019, 101)。と指摘する。永井は、若者への量的調査の結果から、75.7%が好きな音楽のジャンルとしてJポップを挙げているが(アイドルは21.4%)、友達作りに貢献した音楽のジャンルは上位からパンク(73.6%)、ヴィジュアル系(70.3%)、ヘヴィメタル(68.3%)、同人音楽・ボカロ(65.5%)、ハウス・テクノ(62.8%)、邦楽ロック(61.8%)、ジャズ(61.5%)、アイドル(61.1%)、洋楽ロック(58.7%)、Jラップ(58.3%)だと示している。そして、好みがより細分化する高校以降の場面ではパーソナル・ミュージックに近い音楽が友達作りに寄与していると考えられる(永井,

2019, 102-103) と述べる。本稿ではある楽曲 (AKB48 の曲) が、パーソナル・ミュージックなのかコモン・ミュージックなのか、個人の中でどのような位置づけをされているかは、多様に異なることを述べている。そのためこうした知見を踏まえれば、親密な関係形成をするためにはAKB48を個人の中でパーソナル・ミュージックとしての位置づけている者が、同様にそうした友人の前で歌唱する状況であれば有効となろう。また永井の指摘通り、コモン・ミュージックとしてのAKB48を歌唱しているのならば、パウマンの知見を含めて、単にそれだけでは絆は深くなりづらいのかもしれないが、パーソナル・ミュージックとしてのAKB48を歌唱しているのであれば、既述のように関係形成のトリガー<sup>20</sup>にはなり得るだろう。永井の指摘はあくまで音楽を媒介のメインとした友人関係を論じていると推察できるので、Case 2と3のCのように「ネタ的に面白い」と認識されれば、音楽とは関係無いその後のやり取りで、関係形成は可能になってくることも予見できよう。

例えば、パウマンによればカーニヴァルの絆は、テーマパークで提供されるアトラクションのように「経験」されるべきものであり、その場で経験されるべきものであって、家に持ち帰って、毎日の単調な日課の中で消費するべきものではない (パウマン, 2008a, 101) とされる。翻って鍛冶 (2011, 178-179) がカラオケにおけるマナーの問題に触れていたが、マナーが良過ぎても儀礼的予定調和的な反応になり、結局カラオケで形成される人間関係は表面的なものであり、確かな関係性にはなっている感覚は得られないのかもしれない。ただこうしてパウマンが論じている例は、出遭ったその場で形成されたコミュニティの例であり、経験を日常に持ち帰ることのできる、つまり日常を共にしている友人とのカラオケをする中高生とは実情が異なることにも留意する必要はあろう。したがって今後は「気の張る相手」とのカラオケと、「気の置けない仲間」との状況依存的な使い分け (中西・玉木, 2015a, 256) や、ネタ的な盛り上がりを求めた刹那的な思考の是非について緻密に分析し、長期的かつ安定的な関係性の構築を志向していくためにはどうすべきなのか、永井 (2019, 101-102) の知見を踏まえながら追求していく必要があることも課題提起しておきたい。

#### 参考文献一覧

- 小川博司 (1988) 音楽する社会. 勁草書房.
- 鍛冶博之 (2010) カラオケの商品史 (1). 同志社大学人文科学研究所. 社会科学, 89, 49-80.
- 鍛冶博之 (2011) カラオケの商品史 (2). 同志社大学人文科学研究所. 社会科学, 90, 165-195.
- 数家鉄治 (2008) カラオケの社会的基盤. 大阪産業大学アミューズメント産業研究所紀要 (カラオケ産業研究特集号), 0, 1-27.
- 小泉恭子 (1999) 高校生とポピュラー音楽——教育の場におけるジェンダー分化のエスノグラフィー. 北川純子編集. 鳴り響く〈性〉. 勁草書房, 32-57.
- 小泉恭子 (2007) 音楽をまとう若者. 勁草書房.
- 小林よしのり, 中森明夫, 宇野常寛, 濱野智史 (2012) AKB48 白熱論争. 幻冬舎.
- Z. パウマン著. 森田典正訳 (2001) リキッド・モダニティ—液状化する社会. 大月書店.
- Z. パウマン著. 伊藤茂訳 (2007) アイデンティティ. 日本経済評論社.
- Z. パウマン著. 奥井智之訳 (2008a) コミュニティ 安全と自由の戦場. 筑摩書房.



- Z. バウマン著. 澤井敦, 菅野博史, 鈴木智之訳 (2008b) 個人化社会. 青弓社.
- 玉木博章 (2022) メディアとしてのAKB48の歌詞の解釈に関する研究—共感という心理的メカニズムと子ども若者の対人意識に着目して—. 現代と文化: 日本福祉大学研究紀要, 144. 日本福祉大学福祉社会開発研究所. 75-106.
- 辻泉 (2013) グローカル化するカラオケ・コミュニケーション. 近森孝明, 工藤保則編集. 無印都市の社会学 どこにでもある日常空間をフィールドワークする. 法律文化社. 146-147.
- 土井隆義 (2008) 友達地獄—「空気を読む」世代のサバイバル. 筑摩書房.
- 土井隆義 (2009) キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像. 岩波書店.
- 中西裕, 玉木博章 (2015a) 行事によって形成される関係性もたらす行動と心理的变化に関する試論—祭りの後の祭り「打ち上げ」の聞き取り調査を手がかりにして. 就実論叢, 44. 249-264.
- 中西裕, 玉木博章 (2015b) 聞き取り調査に見る若者のカラオケにおける選曲の心理—「一座する芸能」としてのポピュラー音楽消費行動—. 就実表現文化, 第9号. 75-94.
- 中原ゆかり (2006) ハワイの「日本の歌」と懐メロ・ブーム——カラオケの時代と二世代楽団への懐古. ポピュラー音楽研究, 10. 143-152.
- 永井純一 (2019) Gender: アーティストとファンの男女差. 南田勝也, 木島由晶, 永井純一, 小川博司編著. 音楽化社会の現在 統計データで読むポピュラー音楽. 新曜社. 70-88.
- 永井純一 (2019) Communication: 音楽を介した友人関係. 南田勝也, 木島由晶, 永井純一, 小川博司編著. 音楽化社会の現在 統計データで読むポピュラー音楽. 新曜社. 89-107.
- 新美明夫 (1992) カラオケ装置が行動の積極性に与える影響——性格と歌唱力の評価による検討. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 31. 125-150.
- 日本生産性本部 (2012) レジャー白書 2012. (2013) レジャー白書 2013. (2014) レジャー白書 2014. (2015) レジャー白書 2015. 生産性出版.
- ふくりゅう (2013) カラオケ JOYSOUND に聞く, ボカロ文化最前線! なぜボーカロイド楽曲は人気なのか. 別冊カドカワ 総力特集ニコニコ動画 未来はユーザーの手の中に. (株)角川マーケティング. 86-89.
- 本田由紀 (2011) 学校の空気. 岩波書店.
- 松本じゅん子, 多賀谷昭, 北山秋雄 (2015) カラオケとヒトカラによる心身への効果. 信州公衆衛生雑誌, 10 (1). 42-43.
- 宮台真司 (1994) 制服少女たちの選択. 講談社.
- 宮台真司, 石原英樹, 大塚明子 (2007) 増補サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の変容と現在. 筑摩書房.
- 吉井篤子 (1984) 現代の音楽文化. 林進, 小川博司, 吉井篤子. 消費社会の広告と音楽. 有斐閣. 121-224.

## 注

- 1 オリコン HP <http://www.oricon.co.jp/news/rankmusic/2012705/full/> 2022年5月20日最終閲覧. なお, 以降のHP引用も同様に閲覧確認済である
- 2 オリコン HP <http://www.oricon.co.jp/news/2027419/full/>
- 3 オリコン HP <https://www.oricon.co.jp/news/2221032/full/>
- 4 2010年代(平成22年~30年)|平成カラオケ年表|JOYSOUND.com <https://www.joysound.com/web/s/karaoke/feature/heisei/10s/>
- 5 オリコンスタイル HP <http://www.oricon.co.jp/news/rankmusic/2002026/full/>
- 6 第一興商 HP <http://www.barks.jp/news/?id=1000085195>
- 7 鍛冶によれば, カラオケボックスの全国普及は, それまで主にナイト市場でのレジャーだったカラオ



- ケをいわゆるデイ市場に引き上げ、従来からの中高年齢だけでなく、若年層の需要を一気に増加させるうえで大きく貢献した（鍛冶，2010，61）とされ、それまで飲み屋のオヤジ文化だったカラオケは、今日の若者文化として生まれ変わった。
- 8 宮台のカラオケに関する著述は明確に「若者」とは示していないが、当時の宮台は若者に関する著述が主だったこと、また参考文献自体が大学生を対象にしたアンケート調査を基に書かれていることから、若い世代のことについて述べていると判断した。
  - 9 吉井の記述は宮台の述べるカラオケボックスが誕生する以前のカラオケについてであり、両者の記述対象の置かれた環境も若干異なる。だがその上でカラオケの形態は異なっても「コミュニケーションのためにカラオケが使用されている点では同じ」と指摘をしている。
  - 10 ただ、数家鉄治によれば、こうした効果は、スナックから始まったカラオケ文化においては、カラオケを楽しむという目的的结果に伴う随伴的结果（数家，2008，13）であるとされている。
  - 11 なお新美明夫によれば、19歳以上を対象とした調査において「カラオケを歌う時は、普段より積極的になれるか」という質問に対して、性格特性の高低別で若干カラオケ装置が行動の積極性に与える影響の違いはあるものの、普段の行動との落差があると感じている者が半数から3/4程度おり、全体では67.1%の者が「積極的になれる」「どちらかといえば積極的になれる」と答え、各性格特性の得点が低い群でも5割から6割程度であったことが明らかにされている（新美，1992，149-150）。本稿では、若者の関係性志向の歌唱と自己目的志向の歌唱とを比較しているため参考程度ではあるものの、カラオケによって普段よりも積極的な自分が生じるという先行研究は評価できる。ただ、これらは30年前の調査であるため、現代の若者にそのまま投影することは適切ではないと言えよう。
  - 12 宇野は、今のカラオケで歌われるのはAKB48か初音ミクばかり（小林，中森，宇野，濱野，2012，97，99-100）と述べているが、実際のランキングでは本稿冒頭で示した通り、それ以外のアーティストの楽曲も多数存在する。この宇野の発言はカラオケランキングの様相を全く把握していない感覚的発言であるため、この指摘は事実とは異なるものの、本稿ではAKB48の楽曲がカラオケで歌唱されている事実の先行文献という面では評価し、取り上げている。その他、宇野によるAKB48論の批判に関しては、玉木（2022）を参照のこと。
  - 13 小泉，宮台，土井はそれぞれ対象としている年齢層が若干異なる。小泉は高校生を対象にしていることが明記されているが、若者について述べることの多い宮台は大学生を対象にした調査を基にしつつも高校生くらいまでを想定して発言していると推察される。また学校の人間関係等を述べることの多い土井は小学生から高校生くらいまでを想定していると推察できる。よってこれら先行研究の見解を継承しながら、レジャー白書から得られた10代のカラオケ参加率の高さを加味して、本稿では中高生を調査対象に設定している。義務教育課程にある中学校での調査は、全階層を無作為抽出するには最適であり、また高校進学率が98%を超える現代においては、学力階層に注意して平等に対象校の選定を行えば高校も無作為抽出に適している。なお調査対象を推察するに至った文献として小泉（2007）、宮台（1994）、土井（2008）を挙げておく。また、高校進学率に関しては文部科学省 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/main8\\_a2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/main8_a2.htm) を参照した。
  - 14 愛知県高等学校ランキング <https://www.minkou.jp/hischool/ranking/deviation/pref=aichi>
  - 15 この質問項目に関しては、玉木（2022）にて使用している。
  - 16 比較対象として発言者が具体的なアーティストを蔑む発言をしている場合は、アーティストに敬意を評して公表を控える。以降も同様である。
  - 17 一人でカラオケに行き、自分の歌いたい曲を歌うカラオケのこと。例えば、辻（2013）、松本・多賀谷・北山（2015）を参照。
  - 18 この小川のスタンダードという言葉は「スタンダードなナンバー」というニュアンスであり、本稿で使用してきた小泉のスタンダード・ミュージックとは異なる。
  - 19 モーニング娘。、宇多田ヒカル、GLAYの記録は、00年代（平成12年～21年）|平成カラオケ年表 | JOYSOUND.com <https://www.joysound.com/web/s/karaoke/feature/heisei/00s/> を参照。

ただ、これらはいくまで JOUYSOUND 調べであるため、DAM を手がける第一興商のランキングも加味すれば別の結果が得られる可能性がある。

- 20 雰囲気重視して、コモン・ミュージックとして AKB48 を歌唱した後に、こっそり「実はめっちゃ好きなんだよね」とカミングアウトしたことが受け入れられた場合。